いかにも手相見といつたそのひげど私の手のしわ　深見武朗
その隣もせともの屋でせと物いつぱい並べてあつて春さきの雨　福永夏木
椿は赤し手に持つて少女とその弟らしく車内日のさし　泉恩三
はちやすすめやちようちよう、とさくらまんかい　片岡樹裏人
はなさく少し高いところで演説してゐる　佐藤
松の下石がねてゐて石にちる松の葉　佐藤蚤明
そのかなしみにも耐えて來たひととしてえくぼのある　北田千秋子
海から出て月がのぼり海のしらなみ
月がくだけて音たててながれる
ヒヨ鳥がついぱんでしまつて南天と病んでゐる
すもものの花さくらの花寺の塀を曲る
がらすごしに雨にぬれた山の色である
かいつむりどちらみても冬の、水にむぐり
あかあか日あたるをもいで木にゐる
まめひとりではちけてゐる日あたり
汽車のおとがなくなつてしまつた深夜がある
たれがくるでもない庭毎朝掃き南天あかうなりゐる
林の色をひかりふる雨に傘さしてゆく
わたしのあとのふろにはいつてもらつたあとでのおはなし
しづかだと耳すまされるこんや泊つていただく
白い種と黒い種まく夫婦になつてゐる
山の影がどの水田にもほととぎす鳴く
火を焚いて冬虫いつぴき生活してゐる
人の死といふ事をつくづくつめきりばさみ
五月は私の月苺の花ならいちごとなる

正子でもそのうまいということが一つの特質であるのだが、このうまいということが層雲のこんにちの新人の、したがつてまた層雲のこんにちの廿代の才能であるとおもはれる。このうまさの中には技術的なものよりももつと知性の味ひがあるといつてもよろしい。これを端的にいへば鳳車や魚眠洞のうまみには練達からくるうまみがあるのだが、今日の新人には持ち前のうまみがある。これは今日の廿代の知性の一つの特性であると考へてよからう。青春讃歌もよほど理智的になつてゐるとおもう。それにしてもこの句のごちやごちやの繪具の色の中にある青春はまぎれのないものである。

遠山の見える五階から下り家へかへる電車みち横切る

五階には女がゐるのであらうか、「五階から下り家へかへる電車みちよこ切る」にはどこかに足もとを冷静に見てゐる感じがあり理智的であることを失はない。

落葉てをにぎられてやさしいことばをきいてゐるばかり

やさしさともいへないほどのせん細、手をにぎられてこの「若年」は何をまなこの中に描いてゐるのであらう。戀愛の實存主義、「世の中にはかないというものはない　はかないというのは言葉の墓場である。この世に生きて戀ひのある、生きて甲斐ある

精勵苺の白い花ことしも咲く頃となりゐる　岡田涙干

サイレンなれば日のくれる月と菜の花　栃本よし雄

月夜のみちがおまつりのみち　矢島寒雄

一と夜一と夜お盆になる月が山からでる　篠崎青鳩

日がのびたうすよごれた山羊でゐる　降矢百峰

ふかい谷でさくらのはな炭背負うに仰むき　瀧山重三

海が明るくなると稻架が月となる

蓼の秋が白い雲ふかく月のある沼のそばにある家

雨に落ちた大きな葉やタイヤの跡や英語の看板

山がこい色になりこひのぼり

八ツの手花も輕音樂の午後となる裏通り

煙は落葉たいてゐる落葉する小供ばかり

木の芽に雨の石臼はまろくまわす

雲が月を出してゐる木がぬれてゐる

ここによめがくる空間にランプがある

てふてふと思ひ出しておもうときたのし

蓼畑から山を越してゆく電線、春がくる

蓼のいろへ土よせる

靜かに降るに蓼芽をだす

蓼が芽となる籠あんでゐる

ひいらぎの花日くれがあられこぼしてしづかな

梅がさかりなよい音させて薪が割れます

木のまた月が生れてからの春である

はなびら、けふの山のくれたかたちを掃く

月照れば月見草こゆやは逢えそうな

――しかも何というこのはかなさ。はかなさは糸よりほそくさらして目のまへにある瀧のようなもの、それが虚無の中にある神」

あるときはなみだいつぱいうかべてふる
さとのないわたし

これは星童。この感傷は特異である。ふるさとをもたないとはすでに現代のニヒル、このニヒリズムに對して作者は泪する必要をすこしも感じるものではないのだ。したがつてもし泪してゐるとすればそれはそれはおそるべきサチール以外のものでない。この感傷をこのように逆説的に味うことは大切である。もしもこの句をありのまゝに古くさく解釋したとするならば――それは作者を、廿代の若年をぼうとくするものというのほかはない。

わかりやすくいへば、ふるさとのないわたしという稀有なる望郷を望郷のこゝろとすることの出來ないことへの感傷である。しかもそれはもつとも理智的なセンチメントでしかない。ふるさとのないわたしという古臭いイデーに對してこそ作者は滿腔の涙を感ずべきである。

線路の草強しそこを子供あるいてゆく夕燒

この夕燒はもはや吾等の夕燒ではない。當代の夕燒はサルトルの夕燒である。されば「線路の草つよし」である。わかりやすくいへばつよい線路の草があつてそこを一九四七年のこどもがあるいてゆく

音の影が雫する おと　　芦立陶抄子

さびしい日は星もでてくれない夜になる
月夜の満潮の夜光時計のじかん
また世の中にネオンが點くようになつた外套のポケット
どこまでもレールは二本のたんぽぽ
三日月、ネオンの色がせつないほどの細い靴である
鮒がつれます東京裁判があります、雲

枝の芽に露に春雷やみし　　松村邦夫

いなづま、花がゆれてゐてかみなり
朝はけふの日さしてプンとにほつてゐるしんぶん
山に殘雪のある國へ來て汽車がゆうひのなか
人死んで秋の日いよよ美し旅すればまんじゆしやげ咲き
すすき原の銀色と思ふを歸りつつ
庭に里芋の葉柿の木などある宿の昔風なたばこぼん
星あかりでこころがいつぱいになる

知らない山の山ひだにまい朝あたらしい雲が湧、　　内藤善知

ちいさな傘のなかのふたり
ふたりだけの時間で、鳥がなけば鳥の話をする
春の日のおたまじやくしがゐるばかりの水
ちれば はなびら、はなびらは波紋になる
雜草に夕日の人影があつまると手品師はじめます
姉と妹ひとりは椿を手に杉垣の道登校する
岬に白波の見え砂丘のつづきまだ崩えそめない

いい月夜の笹やぶの雪　　大竹大三

稻穗ふさふさと車の輪がまわると牛がひく

そこに一九四七年の夕燒がある。その夕燒は千萬年かはることのなかつた夕燒のあの血のようなさうしてたちまちあせてゆく夕燒けにまちがひない。けれども今日の夕燒はもはや全性質に於て比類を絶するものである。この作者は時代の日ではつきりとこの夕燒を見てゐる。この夕燒の色には現代の絶望の悲痛があるのだ。夕燒は大悲痛である。しかも悲痛の影縮の中を線路の草といつしよにこどもがあるいてゆく。そのつよさ。大悲痛をきはめて冷靜に客觀出來ることの實存主義。

帽子をぬぐと日がもう夏である顔になる

ありふれた句だが、かくいへば新しい味があるなど古風なことを私はいはない。帽子をぬいで日がもう夏である青年の顔のさまざまのニュアンスに意義があるのだ。時代につながらないものには青年性はないといへる。

いなづま青くとうもろこし、風が白くと
うもろこし、雨

この感覺は、もはや吾らの手のとどくところではない。吾らの手のとどかないところに青いいちぢくの實がある。この實が手のとどかない實なのである。何と世の中はまか不可思議である。あゝ年輪の蕊、菊の花瓣の逕庭。

りすのようなこどもたちでただもう光の
らんはんしやです

海へ戸をたててかぜのくる晩　浅井冬二

おせいちやんも嫁にいつてしまつてゐた朝の膳のたまごちちに似た子と母に似た子と父のゐるそばせなのものおろすと影、一ぷくする

川音の、月が木にかげて出る　鹽田正吾

蓼がさやさやのびてきて子供たちえんそくはだかでかぜがあつてはたらくおちばのひかりこどものこゑ

一ふりからりとはれてゆくはしをながれてゆく水にがしてやつた木の枝にしばらくはゐてないて、とんでゆく　里井正子

古本買うてふとところにしてあたたかい山のくもおひよりの木のどこからかちつてくる月のある波が巖にとどこうとするあかくてりんごのまろくてさびしいことなんかないかやの四すみつると風がきてゐる　平松星童

海でどんどんあがつてくる波で聲あげてにげたりして少女ら海の驛でおりてバスが湯へ行くといふ暫くは海にそひ埋立地のかるい雲なんどわたがしなんどうつてゐる

處女のような苺を銀のさじがつぶしては、たべる一政ゐがくといつたようなめざしかさこそたべてしまひ、そうしてゐる

鰯とパンの夕食すましじつにすばらしい夕燒少女夏みかんに指たてるラヂオドラマの銃聲夏のさびしさやせた犬はやせたしつぽふつてゆき野原新緑のまつただなか海のような乳房ふくませてゐるつばめの子が巣でおうさわぎしてゐる下の貧しい兄弟

星童のこどもはどこか新しい。ところがそのわけはいまのところ判別しない。

あが理性、竹林の雪の青しとも青し

「竹林の雪の青しとも青し」は私にぴつたりとくる。さうして「あが理性」もまたぴつたりとする。廿才の悽愴といひたい。健三の「年年」にこのような青くさやけきものがほしい。ここに見る靜脈のような現代の理性。理性とは知性のインデビヂユアリティーである。したがつてこの理性はたしかにその青白いものにかて現代の知性の深核に通じてゐる。

青いスポットにうち伏したおどり子の、死というような時間

手材の問題ではない。例を手にとらへようがそこに廿代の才能は現代の知性を大うつしにする。

此集に溢れてゐる切實な抒情は、響高い訴へと強い哀求のリズムの中に渺々たる鄉愁を含ましめる

橋本健三著
詩洋社版
詩集　若年
頒價送共　三〇圓
愛知縣内海町大塚書店

古本街にて

荻原井泉水

このごろ、用事があつて東京へ行くたびに一二時間のよいうを作つて、神田へ出ては古本をあさることを樂しみにしてゐる。神田の古本街は一部、戰災をまぬかれたから、ほとんど昔のやうに一軒一軒と軒なみに、あさつてあるくことが出來る。

私は第一に、自分の古い著書で、自分の手許にないものを見つけようとする。著書の出來た時、發行所からまとめてもらつた物は、數のあるまゝに人におくつたり何かして、まだ數册殘しておいたつもりの物がいつか一册もなくなつてゐることがある。「大地に歎く」といふ隨筆集は、そんなわけで、手許にはとうから無くなつてゐたのを、アメリカに行つた時、サクラメントの日本人街の本屋で發見して、買つてかへつたことがある。「古人を說く」といふ俳話集は、こないだ大阪の古本屋で見出して手に入れ。人が來て、先生の此本を神田で見つけてきました、などゝ話すのだが、自分が行つてさがすと、なか〳〵見あたらない。だが、書棚を見まはしてゐるうちに、あゝ、あの人の此の本があつた、これは讀みたいとおもつて、つひ求めはぐしてゐたものだ、よく見つかつた、とうれしい氣がする。それから、自分の本のことは忘れてしまつて、何ぞ好い本はないかとあさつてゆくと……ある、ある。昔は、こんな好い本があつたのだなア…とおもふ。紙質も裝幀も、これでこそ「本」だといふ氣がする。表紙うらの値段づけを見ると、高くはあるが、然し、このごろの新刊が惡い紙のうすつぺらなもので五〇圓もするのと較べれば、百圓でも安いものだとおもふ。

昔、ギリシャの王樣の御殿へ、一人の老婆が推參して云ふことに、自分は「運命の書」といふ九册の貴重な本をもつてゐます、これは必ずお讀みにならねばならないもので、價は一萬圓です、と。王樣は、それを見ると、ボロ〳〵のきたない本なので、一萬圓とはあまり高價ではないかと云ふと、老婆はいきなり其内の三册をとつてストーヴの中へ投げこんでしまつた。そうして、殘るのは六册きりです、これを一萬圓でお求めなさいと云ふのだ。王樣は、九册が六册になつても、やはり一萬圓とは不合理ではないかと云ふと、老婆は又も、其中の三册を取つて、ストーヴの灰にしてしまふのだつた。王樣はおどろいて、今はたつた三册しか殘つてゐない本を、初めの云ひ値で手に入れたといふ――そういふ談がある。大戰爭の災禍には、全國でどれだけの本が灰になつたかしれない。そのあとに殘された本こそは、このギリシャの昔話にある、火をまぬがれたわずか三册の本のやうなものである。

こうして、神田の古本屋の軒並を見てあるくと、昔の本は、その紙質や裝幀ばかりでなく、内容もじつにしつかりとした、りつぱなものが多い。ことに、古典の研究といふ風なものに、どう〳〵とした著述がある。戰爭中は、日本主義をこうようする爲に古典がこういされたが、それは時局に便乘した解釋であつて、正しい日本の古典のすがたではなかつたとおもふ。たとへば、萬葉集にある「さきもり」の歌でも、「かへりみはせ」ずだけを取つて、妻子に心をひかれるといふ人情のある歌（此方が多數である）は無視されてゐた。こんな風に時局的にわいきよくした見方でなしに、日本の古典のう

つくしさを見直さなくてはなるまい。西洋のことわざに――古典とは其名は好く知つてゐて、かつて一度も讀んだことのない本のことである、と。此の皮肉はじつさいである。私達は、新しい本のもつインキの新しい匂ひにたわくされて、古い本のよろしさを忘れがちである。清少納言が云つてゐる。――「うれしきものは、まだ見ぬ物語の多かる」と。さうだ、かねて見たい〳〵と思ひつゝまだ見ない本を手にしたときの喜びは、何とも云へない。とにかく、神田の古本街に來て、好い本はないかとさがしてあるくことは、いかにも樂しく、それを見出した時は、いかにもうれしいことである。

書畫の味

このごろ、床に磯野靈山子の一幅をかけてたのしんでゐる。それは、碧岩錄にある金牛和尚をかいたもので、飯びつを手にして呵々大笑してゐるところ、「菩薩子喫飯來」云々といふ名高い文句をかき込んである、その書もなか〳〵好く出來てゐる。これは私が京都に住んでゐた時、或日、靈山子がたづねて來て、反古のやうなものですが見て下さいと云つて、くれて行つたものだ。かれは、その頃、近江の或寺に假寓してゐて、ときん〳〵京都へ紙を買いに出てきた。そうして、其をかきつゞけると、又、京都へ來て、若干の金にかへて、其金で紙を買つてかへる。かれは金がほしいのではなくて、紙がほしいのだつた。彼の作品に市價といふものはなかつた。彼はただ、自分のたのしみにかいてゐたのだ。だから、これをかけて眺めてゐると、こちらもまたたのしい氣持になる。

ある書畫屋さんの談に、芋錢子が存命中に、畫をたのみに行つて金一封をおいてくる、その封中に、當時として少し過分と思はれる金をとゞけておくと、芋錢子は念を入れて色彩を多く使つた作をかいてよこしたさうだ。だが、今日になつてみると、色彩のベタ〳〵としたものよりも、墨一色でさら〳〵と、たのしみつゝカツパ一疋かいたといつた風のものゝ方が高價なのださうである。

もとの中央公論の瀧田樗蔭氏は雲坪の繪がすきで、目にとまると買ひ集めてゐた。その當時は、一本五圓といへば手に入つたさうだ。ある時、瀧田氏は漱石氏の許へその雲坪と、百穗とをおの〳〵二三本づゝ持つて行つてみせた。と、漱石曰く、この百穗は包み金の多少によつて書き分けしてゐる、雲坪の方はそんな氣分がさつぱり無い、この方がおもしろい、と云つたさうである。

百穗は畫家としても、人格としても近世畫家中でじつにリツパな人だ。此の漱石の評はヒニクにすぎないとおもふが、雲坪が金錢にテンタンであり、常にたのしんで筆をとつてゐたことは事實である。尤も、たとえ金がほしくとも、金にならないことも事實であつた。明治二十年時代の談だが、雲坪の畫料は半切一枚五十錢だつたといふ。かれは、キヌにかいてみたかつたが、キヌを買ふ金はなかつたし、又、だれもかれの所へキヌなぞを持つて賴みにくる者はなかつた、といふ。だが、雲坪の作として、キヌにかいたものは時々見あたるのである。けれども、キヌにかいたものは、どうもかたくなつてかいたといふ感じで、面白くない。やはり、當時は一枚二錢か三錢だつたろう、やすつぽい畫せん紙に、たのしんでかいたといふ風のものが、おもしろく出來てゐる。

とにかく、作者がたのしんでかいたものこそ、それを掛けて眺めて、ほんとうにたのしい氣持になれるのである。

明月壇

若者娘とむつまじく行く田は水田になりてゆく　高橋政二

冬海あれる役場のがらす戸　古川紅雲

櫻にまだ寒い風が水にかいつぶり　内藤英夫

道がしばらく堤をはしるバスと春の遠山　加藤六六子

そばの花今頃戰死ときめられて役場へゆく　中西國友

靜かに町をうつしてゐる水大根うづたかき舟がくる　石井洋音

槍も穗高も見える青空が學校の屋根のうす雪　永田杏平

ほつと見る氣になつてこよみ今日種まきによろし　吉原三峽水

城跡千年の石垣へ今日の日が西日となつてゐる

ふきのとほどよう降つた雨の晴れてゐる

日曜といつたアメリカ兵と櫻は二三日で咲きそうな

陽が入ると月が出てゐる櫻にゐる

ふきのとちいさんよごれた手拭ひで鉢卷する

星が青葉のかげ待つてゐる

雨のはれまは蝶々がくるいちごのはなひるどき

つゆぞらふきあげて噴水の、青葉にあめ

影は宵月の若葉のみち牛が通る

みづに散る葉の三日月

しぐれてはれて月のあるかはやのなか

空ははるかなりトンボが肩にゐる

すくすくと杉赤いつたが登つて行く

からたち雨やんでゐる白くさいてゐる

孤獨とは見たくない孤獨のきもち山吹を句にする

金魚赤く泳いでゐる床屋さんお待ちどうさま

吹かれて表も裏もあたたかい嶽の上の木の葉

病めばうとくなる木の芽とて便りする

れんげさいたればくさにねる

ひとりねてゐるときの木の星

あさやけのはたけの土

卓上のりんご、夕日がそのまま日暮となる

麥の芽ずんずんのびるような山羊が背伸びしてゐる

まだはじまらないサアカスの音樂だけが星を吹く風

山の端に星が見えそめるころの開拓村のあかり

すつかり春めいたこの道は丘をのぼつてゆくのです

出たばかりのお日さまからタプレットわたされて走る

春の夜のぴつたり春を込めた本箱その扉をひらく

うらうら貝がらに蝶のとまつてゐる

つぼみぴつしりつゆつけたつきよとなる

崖の雜木林かれがれと靜かなる、にゐる

みづのなかの水がたうたうと流れてゐる

美術館の空の雲が白くて名畫展の大きな看板

いわし雲の出た日は鰯やさん呼びとめてゐる

赤とんぼうは白い砂の上に死んでゐて赤い

水と青あしと、青空に水光つてゐる

青葉に窓を開いて洋裁學校のミシンの音です

遠山には雪のかがやく貯水池のあたり梅開く　竹久清信

山が丸い月を上げてゐるさくら　渡部枳

雨が晴れると豆の葉に風が豆になつてゐる　中村未知男

一日寒くて牛がとことと月夜となる　中村秋夫

けふ牛もいそがしかつた洗つてゐる夕燒　中野弘雄

青あし伸びて行くボート屋さん　田中無絃

春だボートだまだひやつこい水だ　水野田々鳥

子供は寢巻でつぼめが來ました　杉本伊之助

冬の日の光のぞいてけんびきょうの中の世界　平野榮一

雀たかくとびお墓に供へものする　福田井村

人と冬すごす氣持に茶のみ茶碗手にし　淺野保榮

お寺をはなれ行く十數人雪徑につづき　清光寺健

雪ふる事もおさまりどことなく日のさしてからす　永井耶南

星が冷えてくる白いてぶくろに手を入れた　富永谷衣

けさ秋がまつたく雲をなくした萬葉集の一卷より

あきはやまのなかひざなかのにぎりめし

あめのあがつたおほきなほしがぬれてゐる

げんのしようこの花もある同じ道つとめに出る

にぎりめしの三角三ツたうべ積のうるしもみぢ

おもちや箱からころげ出した椎の實で火燵で

朝早くて曇り川原の木槿折りてゆく

日が隣へ移つた小屋の鶏追つてゐる

四方山の話冬日が部屋にいつぱいある

枯あし、水がぢつとしてゐる

冬の日中天にあり連山端正

月、更けて鳴き通してゐるので

雲も山も秋となつたプラットホームも

日曜日梅の花風邪はゆつくり寢るとする

遠山の線、彼岸の入日しづかにはいる

雨やんだ空の枝がぬれてゐる

寸土もあまさじとたがやしてある道の芽が出る

砂からひろひあげてしげしげとみてゐる

すこし風が出た水面のうきの赤いあたまであり

花ぐもりが耳をすこうし遠くしてゐる

春とはいふものの、またちらちら粉雪が酸素熔接の青い炎

うす日さしてくるで水仙のつぼみが花房を割つてゐる

牛つないで子供らも居る切干ほしてゐる

梅咲いてぬかるみを梯子借りてきた

青麥の中のあき畑に何かまいてる風もなく

ふるさと丘の教會むぎぶえふいてゆく

夕雲がバラ色になると子等のかもめかもめの歌になる

バルコニイと若葉とキャンバスからこみちがきえてしまふ

まことに春の色なる柿の芽、その空の色

朝、ま白き水仙の黄の大きしべかな

雪に道つけて詣でてお墓の雪にさす花

桑つんでゐる女の顔夕日が映えて

配給の酒を、夜のしづかな牧水の酒の歌である

戸をたててひとり氣持になつてゐる夜風吹いてゐる

あたたかく枯れてゐる釣つてゐる

ひとりでは淋しい子で冬の雨見てゐる

硝子ふけば空の色になり朝寒　池沼星兒

葉闘が綿虫をとめてみぞれになる　安達俊郎

暮れかかると雪空、鯖三びきばかり串にしてやく　崩場黎山

夕ぐれ水に枝垂れて吹かれてゐる木屋町三條下る　小泉鬼魂郎

青葉、青葉の中のこの徑傘さしてゆく　小川環

こうしたところで陛下をお迎へしまうことは、麥熟れてゐる　水田草史郎

長い鐵橋の月夜で月見草咲いてゐる　廣田不知火

晴れては古い傘が一本、旅をする　仁平青蛾城

蛙の聲も月夜のあら壁　阡陌多代

明け方は少し寒くて山の青葉家のおんどり　鈴木單衣女

ここから母の墓見ゆる見て食べ物の工面にゆく　杉原明雄

ぐみの青い雨がそのまま梅雨に入る　倉本勤也

病めば、ふるさとからすがおりてゐる麥畠　梁瀬阿羅與

復員しまして同行二人島の道春をゆく　大鹽皓々

それがあなたのこれが私の道私は石を切りにゆく　福本逸子

電車のスパークしてゐる街、並木がポプラが芽ぶく　森田和夫

落ちてきれいな花びらで一つ一つ夏である　平賀夕星

こずえ、月が出たらしく合唱です

夕日が麥をふむもし一粒の麥死なずばと

落葉の校庭は日あたりのよいバスケット蟹も

魚籠のぞいてからのみちづれが夕燒けのふる葉

雪の山はよしこの驛のすぐ坂となる町なみ

大根は軒にいつぱいのもみむしろで居るのになるらしい

風はかれた唐きびに吹いて家がたつと入つてゐる

毛糸まで日のさしてきた障子が蹠すぎ

八ッ手の花の花ごとに日かげを持つてゐるかをかともなし

窓際を戻つてきた母のこうもりが夕ぐれ白い雪のかき

ぬか雨、工場の電氣がよるのままである

月が出てすもものはな戸を引いてゆく（鹽原にて）

川、たばこの火つけるかぜがもう冬の風である

麥が穗に出てみどり新しい山並みを朝

投票所が學校の女の先生のゐる青葉

少女きよらかに梅もどきもち夜の電車

桑株おこすごぼごぼおこす

城内ひろし白砂利しいてさくら咲く

うす紅の寶をもち段々畑の桃の木

ここまできて谷川の音をきく夜である

砂利山のひまにも萌え出たよもぎそれを摘む

こんな田舍のいざこざを巷園の出來を云ふ

遠くに進駐軍兵舍の夕日になつてゐる麥畑麥の芽

本を讀みながら通る麥の穗がそよいでゐる

娘さんメガホンでさくら葉ざくら

びわの花月夜たらいの水へも散つてゐる

あらしの止んだ枝の蜂の巣が空つぽ

秋雨火鉢がほしいやうな家の内皆居る

こんな木蔭のさざんかひつそりひらいて窓があかるい

ゆきの日家風呂たててゆきがやまない

軒のしづく辻の地藏樣も雪解してゐる

三日月の赤いのがせつなくてきりぎりす

冬の海がしづかに石炭の山が低くなつてゐる夕がた

病人巡動に出て朝焼の霧に雀が下りてゐる　東　草二郎
草が秋の日にほひ堆肥の匂ひも草咲いてゐる　松村禎久
すかんぽなかはからつぼの笛ればかり音たてる　佐藤コト
さいたままさむくなり石蕗のはな　小松香向射
散るばかり來て散つてゐる　眞島兎眠草
一服してゐるお百姓も遠足の子供達も朝日　佐藤紫香
雨になるらしい木の枝のうそどりの赤いのんど　白澤道子
湖に月さして月のある山のすがた　日野素木
雪から土の出てふきのとうどもまごと　細田敏子
日の落ちゆく山肌の雪に朴の芽大きくある　佐藤正作
枝の雪おちて枝に散る日がさすと　櫻井紫村
明星うすれゆくさむくかひばきりだす音で　櫻井白朗
窓に青葉のリルケの詩のやうな朝です　飯塚宗人
よもぎかごに一ぱい日がくれました　田中冴子
村役場なら橋を渡ると櫻の冬木いつぱん　市尾衣谷
くるみ割る石も、寒の日　柝木敏男
一りん、大山のいただきのこのあざみ朝になる　飯野無花果
雲、ジャンプ臺も見えてゐる豪内山いつたいの夏のさかり　吉村しをり
草笛が夕べ田植の母を待つてゐる　野口光
三年生の歌が山越えてきたみんなつつぢをもつて　寺田夷平
坂の上の建物が農業會です左も右も蛙の聲　矢島川せみ
一雨して山の新緑音は汽車ののぼつてくる　武田まこと
洗ひものすませた妻の爪きる音かちちつく雪か　三好茶丘
それからデモにゆく旗は空へ振りてゆく　小野勝次郎
窓の櫻ふくらんでゼネストの話君たち僕　竹澤しげる
しづかな顔がはなしてくれる流れいつぱいしかか雨ふる
からすよ林の雑木はまだ裸で　
雨がごう雨となるいんげんの花　
ああ乘つたとおもう鮫梯音してあげられる　
世の中めまぐるしとおもうまどろんで蟹を病んでゐる　
詩をよもう山へ行かう山若葉してゐる　
つぼめの來たこと云つて勤めに行く　
こんな大きなさつまをこれからたべようとする　
少年力いつぱい唱ふ冬ぞらくれてくるのか　
ひよこ青菜たべて畑の雪とけた青菜　
あられふりたまるほどはいはほのひだ　
配給の粉の團子で子とわけて彼岸で　
師走ぞらの乏しい配給の青いさんまの氷です　
時計屋の時計はまちまちに打つてみぞれ　
母音よりもかなしい文字をかいてゐるみづすまして　
たんぽぽも膳の上にして白の小皿　
三ッメの山、華山先生の山かすむ　
朝は病院のなんでもない庭に煙がはつてゐる　
雀が裸の枝に鈴なり夕焼ける　
藤の花机が一つしづかな　
水に木が青くて雨ふる　
日が暮れても遊んでゐる聲が春だな　
上げ汐がどぼどぼする春が蠱つてゐる　
灯があつて水が流れとるくちい晩　
ぬれた青草をおうて戻つてくる山道朝

はだしでふむ土が柔いトマトに日がさしてゐる　雨宮すぐる

ふるさと桃が大きく青くうつむいて仕事する兄で　植野香林洞

もう木のかげがほしい畳から染物急ぎにゆく　前田　昭

しようぶは家の魔除けにする若葉ころの雨　佐竹久枝

小舟水尾ひいて行くみなとの町にふる雨　長山林二

降りてしぐれのバラック、海を遠くに　吉岡正泰

まいにち電車で櫻も柳も枯枝　梅木成敏

お星さんうたが半分しかわからなくて涼しい　飯田三茶

炭山ははぜもみぢ美しい朝の通勤電車　永井喜太郎

涙が涙を追うてゆく月照りわたりゆく　丸山ゆうじ

雪は伊吹へ集めた月の光り月の夜　小谷秀雄

ちらちらした小雪が日和らせてみたりして大寒の入り　大山冬石

風少しあるさざなみ明けきらない月が影する　桑田義人

あめが、とうげをこして城下町へおりてゆく青葉

焼けた壁を黒板にして青空授業女學生たち

屋臺の湯氣たつものをたべてゐる姿も冬朝

星が一つづつ消えてゆく麥まく

もう暮れてゐる雪で月夜となつてゐる

ばらの木がめぶいてゐる干し物がしづくする

てふてふ泥水にある空にうつり

野の道夕日明るくてみんな歸る人

雪ちらついてゐるピンポン

山に日が冬になる位置ふるさと

ことしの蠅が出た蠅たたきもつて失業してゐる

舟でこつこつ春の日なにかおちいさんで

短日のからすも教室の窓くもつてゐる　酒井健之

納豆めづらしくて母がお産見舞から歸る　長谷部丁字路

みぢかい日の、日がおちて山の月は池にてり　木梢洋子

うろこ雲うごかずよ稻はざにかかり　齋藤第九人

秋はれ子供に道をきき漁村が入江が下に見える　鎌田一相

ぽつぽつちいさいきのこ落葉があつたかい　佐藤緑雨

丘とちらばつてゐる屋根と月夜の雪がはれてゐる　山本杏子

霧が、けさもミルク買うてくる子供　吉川群孤

あなたと手のすすきなど語りあるく　三枝重峰

こんな時世となつて死なれた母に墓を供へる　中村伊知郎

もみぢ晴れてゐる大きいにぎりめし持つてきた　平位青水

亡母の摘んでくれた千菜である食べてゐる　岸田谷川水

アトリエ君のゐて僕のきて行々子ないてゐる

雪ちつてくる花言葉問うてゐる

かたくなな木であり蕨にわる風まだ冷たい

おちば、あらうみのなみにもちる

越してきてこども二階の窓にひとり、冬

いらか、いらかと重なりて月夜

蝶々川へ出てすすきの風となつて暮れます

來て焼け跡の町のめがね橋と秋の水草

一日秋のもの蒔いてゆうべの雲がいろいろな形

けさ傘などほすと鶏の出てあそんで柿の木の柿

ほし店の栗も大きいドコドンドコドンお祭

娘も出て麥刈りする一服にするこうめの實

病舍の窓までとつてきた南瓜のつるの花であり二つ三つ

旅先のはがき入れよう山見れば涼しくなる　増田折翠子

死に顔が死んだと思へない火鉢の火をつぐ（父の死）　高橋幽亭

畦に立ち種をまかう苗代の青空

親子で苗代の苗とつとう啼くと夕べになる　入江功一

身近くに枯山、小松の一むらは日が照つてゐる　渡邊天仙果

焼けた木の中から湯屋の煙がけふはほのぼの　西田白雲

寒さもまだ波がひきしほです　明石青蘭子

千葉かさかさと鳥がけさも來てゐる　森景かん郎

わらび餅にあふれるほどな梅も見えて一ぷくする　青山さゝ子

ここも工場の中で暖かな日ざし車ひきひき通る　小松南苑子

西日に出口のあかるさを出る　佐藤竹仙果

柳に水音して雪の窓は雄物川に　岡田しづ子

麥もぐびた雲かげ出來たりして小屋から顔出してゐる牛　鶴岡邦彦

選擧の速報板なら人がいつぱい夕日がいつぱい　犬飼啓三

山を出て谷を出て流れる芽ぶいてゐる　渡部尚

麥飯のお茶づけすますと田に出しまふので　室伏一葉

ふるさと薪割る人に言葉かけてゆく　清水德治

藥瓶にさしてバラの、妻がきて寒く坐る　山峰勇峰

お正月がくる妻と障子の切張りする妻と　寺田五十人

あてにはしなかつたものの霜どけ道　櫻井雨村

榛の木の花からす一羽風に流れてくる　淺野一男

山に雨のきそうなあちさいの花澤山の中からくれる　遠藤梵子

卵の黄身が重たく落ちて白い丸い皿　櫻井秀洋

退職近い横顔を机において沈丁花かほりくる　櫻井草雨

家鴨のゆく先の蓮田へ道が曲つて吹きさらしの筑波で　けふも停電の早い夕餉にして　ふも清飲

雨戸に風がきてゐるみんなだまつて火燵にゐる　色川白帆

星のやうな穴だらけの屋根でその下書寢してゐる　宇都野まさみ

インキがざくざくにしみてくるペンが書く文字　田所倉雄

池をめぐる月夜の風である　前田むつを

妻よ梅が咲いたよ梅をそなえる　森田松枝

夜の道をふたりにて蛙の合唱ゆくに橋　山川白朝

ゆきもかへりも歩いて焼跡もう薬櫻　平松颯々子

嚴には岩百合の海がしぶきとなつてくる道　井倉廣志

向う山に雪がきた鯉をいけすに入れるひととき　廣橋鋼一

麥まき終へて秋のまちへ出て行く　栗田千可志

新米つみかさねられてありけふは雨の日　鍋島次男

もう夕餉の煙日がのびてきて鑛山長屋　長谷川善一

さびしさは手相見小さい灯をもつてゐる　齋藤仁

柿の葉一度に落ちてしまつたけさの一年生の雷　池邊象外子

蜻蛉ざわめく音が祭の太鼓　守屋詠三郎

こども用水桶に空の青さのぞいてゐる　小澤養心王

海と岬と黄ばみたる稲田が海まで　鹿俣靜哉

機關庫の裏の春の日助役さんも出てをる　岡垣整明

寒い星で道を行く　湯淺影外子

坂の上にはまだ日のある時計臺のすすめ　千葉戴葉

夜業の機械がうなつてゐるはだかの電球　吉田青

母ともひさびさであるくひがんばな　渡邊ソウ

どの土産屋もからつぽの店先春になる雨　積木晃楓

米山も秋のそばの花日和の、佐渡は海のうへ　池沼源吉

小山清

さくのつつぢが咲いてゐる改札はじめる　太田節子
泥燕土間に置きそれだけの暮しの夕べを　鈴木華翠居
家の人家に居り雪に雨ふる　石黒泉女
法衣をぬいで瓜苗うつすふたうねばかり　小澤法雄
プラットホーム日かげると汽笛ふいて汽車の來る　海堀鬼胎
すもも花咲いて胸を病んでゐるあなたで　増山田比良
田の水あふれてゐる道影のない曲つた道　鈴木昇
一匹出ると一匹入り働いてゐる蟻午後の日ざし　村越庄吉
人々それぞれ梅さく公園日曜　三井靜峯
丘の上白くみえて山羊の親子ではる　石川青花子
馬もひといきいれてゐる太陽眞上　山中勉
青空から雪がちらついてくる屋根の風速計　渡部紀代詩
木がなんぼんも立ち毎日雪ふる　田口木吾
返事もよこさず逝つたしらせの白い四角い封筒で　野口政光
みんな歸つたあとの病室しろじろ冴えてゐるばかり　澤田惠子
けふの仕事すませた火を入れる消壺のしづかな　堀みえ
空に雲がながれてゐる早春のぬかるみ道　菊谷喜美子
アカシヤの花の明るさ搖れてゐるこぼれてゐる　北爪彌生
連れて出てもう少し先まで送つて霜どけ道　山添是空
山の雪のガラスしめてある月夜になりました　安藤香心
雪の學校が終えた雪の家へ歸つてゆく　星野あきら
雪花今は辨當さげ行く父でありし　青木丘草
つばめ電線にとまり又とびゆき雨のふる　佐藤榮子
沖から沖からふくれてくる波ラムネをぬく　三井重尙
かわづなく田圃になく友と歌つたあの日のこと　磯昭二

咲いてもうぼたんのくづれる、藁家しづかな　鈴木椿子
心いそぎ驛へ道つばめとぶ　阿部シゲ
藤のにほひむせるようなこんやお月さま　山内小糸
となりが藁打つ音のちらちらの月光　五十嵐みい
誰彼一枚の勞働新聞冬日しづかな　菅原西人
よく笑ふ娘さんがゐて滿員電車で春で　松下千秋
朝のとぎすました月が石のかこひに湧いてゐる水　片桐光成
ここは世間のそと、松林の中白いほうたいで笑ってゐられる（長島）　片桐經子
朝日やわらかな井戸のそばはうづき赤らんでゐる　片桐弘子
じきに學校が夏休みとなる空の雲こうちの子がゆく學校　河重菊乃
けむりがふねになつてくるのでなつのくも　海野碧水
波が月の波となつて子供岸べをこぐ　並木里聲
今日は海が風らしくて私に一つのゆれいすがある　松田きさら
雨音やみそうもなくて宿の隣子しめきつてゐる　白崎一二
竹の皮に味噌をもらひ厨柳雨ふる　小川清人
ひらいてつぼんで子供うたつて大きな夕日　山内康子
みんな輪になり涼しい月がある　青山青花
低氣壓圏といふ空である蕎麥の花　熊崎奇千
父さんも日曜日すだれの中ちやぶ臺で勉强する　伊東俊二
木の奥のざくろの花とみて二階へかいだん（氏家鬼繪知氏宅二句）
裏の杉の木に松の木に一雨すぎた諸君と先生
青田ひろびろと家が牛舍を持つてゐる其家、道正氏宅四句）
旅で先生のあとの湯で風が涼しい話きこゆ
牛舍牛がゐ木の下雞がゐ田植最中
ほたる呼ぶ聲も庭木の茂りようも句を廻し

層雲京都句會

もう前日の朝から東京の稻市氏の來社があつた。横濱の八洲雄、丹後の鹽南、但馬の逸朗、草山、阿木、浪千、伯耆淀江の影外子、名古屋の魚眠洞、岐阜の青史氏等も乘り込んできて氣勢をあげてゐた。井泉水先生は一週間も以前から入洛してこの會を待つてをられた。六月二十九日。東山の青葉がしつとり落着いてさうして爽かだつた。地元の木衣樓、小平、香林洞、平一郎、草史朗、泰山、朝陽子、俊朗、久枝の諸氏が會の幹事として會場の高臺寺へ詰めかけて用意おさ〳〵怠りなしと言つた形で早朝から句會の雰圍氣を作りあげる。東京の句會では何時も會の果てる時刻に來る浩二氏の顔が先づ見える。それから……ぞくぞくと八方から集り、十時開會、よどみなく句會は進行する。出席者（上記の人の他）—敬稱略—

佐賀縣の木天蓼。宇和島の井夢。豊橋の善知。三重の牽牛花。福井の無絃、如水。奈良の虹子。岡山の赫城子、としを、茶丘、蔑、いわじ。兵庫の恩三、草樹、信夫、谷衣、六郎、英之助、大阪の夢郎、蝶三、秀雄、清宇人、篤一、比左志、阿羅與、勇、應香、水子翠江、牧句人。京都の冬川、充夫、呵歩、卓朗、すぐる、英夫、野萬子、二郎、名京子、千代吉、敬一、昭、ふき子、荻、惠美、鞆繪たつ子、隆人、仙醉樓、俊二。

×

次頁に掲げた先生の句評のある句の他に、先生の選に入つた句は

熱れ麥の穗しんしん日中の空　信夫

ばらいけてばらが散るちかごろ出すにゐる　冬川

娘はたちころの縞のきもので百合さげてくる　朝陽子

はだしでふむ土が柔いトマトに日がさしてくる　すぐる

降りそうで麥は刈る麥田次々青田となる　夢郎

すだれごしに氷がく音のしてひともし頃　應香

勤めに出るまへの子を抱いて青い無花果　翠江

霧から日がさし牛追うてくる道　恩三

宇治苑道稚郎子の御墓は青葉の頃苗代の頃　昭

落ちてきれいな花びらで一つ一つ夏である　草史朗

赤ちやんのふとんほしてゐますうぐひす　荻

朝のあざみあざやかに一りん我が道を往く　六郎

どこで鳴いても馬どこを歩いてゐても私　仙醉樓

あを梅葉のなかにながめをる思あさ　草樹

雨が木に晩の飯あと　綠平

遠山まで淒明な夕日がいろいろの芽をもつてゐる　道雄

夜に出た月をこども抱く　翠々火

まちなか空氣がいつぱい朝の水を一寸した橋　充夫

一句の高點は、和田鹽南氏の

まことときれてゐる抱けば猿顔の幼いにぎりこぶし

が十四點。原田赫城子の次の句が十點であつた。

花をとほる雲が月夜

綜合點の高點は、林木衣樓氏が二十點、上柿小平氏が二十點、原田赫城子氏が十八點であつた。この句會に出された先生の句は、

牛が働いてゐる、田水張つてあるうねび香具山

窓からじやがいもの花ふりかへつてじぎしてゆく

ころんで泣く子あたまなでる子君によく似た君の子。

句評

井泉水

こども旗のやうに髪なびかせて風をかぜのやうに走つてくる　星童

（評）髪を旗のやうにと見たところが詩的の感覺である。ただし、髪が旗であるために、髪から肉體から離脱して見えるところに弱點がある。つまり、感覺のための感覺であるかに見える。その爲に「風を風のやうに走つてくる」といふ實に新鮮な表現も、調子に乘つて出た言葉のやうにきこえる。ソンのところがある。

線路の草つよしそこをこどもあるいてゆく夕燒　星童

（評）「草つよし」で切つて「そこを」と改めて出た。このリズムがくつきりと力づよくていゝ「あるいてゆく」何でもない言葉だが、一歩一歩ふみしめてゐる。「夕燒」は平凡のやうに見えて然らず、好く描けてゐる。

こまごま書きおくるごとのこごめ花まだ降つてゐる　涙干

（評）情味のある句だ。「こまごま……こごめばな……」ここに音感の連鎖があるやうだ。かやうな音感的効果は一おう面白くはあるが、此の効果をあらひすぎると、内容のまづしい弱いものにすべり込む危險がある。

降るでもない夜明が果樹園いつぱいの花です　涙干

（評）「降るでもない夜明」のうつすりと曇つたいぶし銀のやうな空氣の中に「果樹園いつぱいの花」は生命にみちゝてゐる。技巧に亘ることなくして言葉がはりきつてゐる、かういふ行き方の方がいゝ。

螢とぶ後添ひ貰ふ氣になつてゐる　呵歩

（評）實情の句。シンミリとしたものを感じさせる。この螢には、亡き妻に對する感傷もあらうが、それがセンチに流れてゐないところがいゝ。「螢とぶ」といふ景趣をソツと置いてあるだけで、それが決して取つてつけた感じでなく、内包的にしつくりととけこんでゐるところ、蓋し、心の底からにじみ出た作たる所以であらう。

あめがあめのあとみづにふつてゐる　英夫

（評）鳳車かとおもふやうな句。明るくて、明るすぎず、靜かであつて、動きも出てゐる。「雨のあとの雨が……」と云へば、散文的になるところを、「雨が雨のあと……」と印象的にタッチしたところに此の句のたしかさがある。

遠く夏輕い雲を電車川の上に出て川風をゆく　魚眠洞

（評）老練な句である。これだけの事をこれだけに云ひこなし得たのは、かなり苦心した末だらうと思ふ。之はそうとうに長い鐵橋だ。それを幾分離れたところから見てゐるのだらう。鐵橋が一本の線となつて、電車が宙に浮いたやうに見える。音もなく、かろ〳〵とすべつてゆくやうな――そこに「遠く夏輕い雲」も同じく作者の眼界にはいつて、たしかに一つの風景としてまとまつてゐる。そこに「川風を行く」といふ動きあるので、此の風景が生きるのだ。此の川風は、作者自身も亦、身に感じてゐるにちがひない。

オルガンいつからともなく梅雨がふりやんでゐる　青史

（評）いかにも「オルガン」の音である。若しピアノでは、ぜん〳〵句になるまい。「いつからともなく」がうまい。五月雨がふりやんではゐるが、梅雨があがつたのではない。しめつぽい、重たいやうな空氣をふるはして、オルガンの息づきがオルガンらしい音色を出してゐる。

山の肩に日がはいり山の裾に灯がともり夏に入る　　英々助

（評）描寫として行きとどいてゐる。あまりに行きとどきすぎて、リズムが弱いといふ難點もあらうが、とにかく、スキのないカッチリとした句ではある。

可がおはぐろつけまして紺がすりきたおよめさん　　虹子

（評）目のつけどころも、言葉の云ひ方も女性の句に違ひない。隣の家におよめさんが來て、家の横にある畑に出て豆を摘んでゐる、そのおよめさんに聲をかけながら、自分も自分のうちの畑の豆を摘んでゐるところ――其のおよめさんも古風に「おはぐろ」をつけてゐるのではないかとも思ふが、それはあまりセンサクに過ぎるといふものだらう。

家から山が見える其の家の葱坊主ばたけ　　稻市

（評）「家から山が見える」は描寫としてイージイに過ぎる。作者が稻市であつて見れば、猶更、稻市風の念を入れた見方があるべきところだらう。「葱坊主ばたけ」には動かぬものがある。

椿のはなおとりの鳥を鳴かせておく　　木天蓼

（評）取材としてかくべつの新味もないやうだが、「鳴かせておく」といふムザウサな表現に、ほゝゑましいものが感じられる。

こども胸にかかえてくる玉菜うすいみどり　　千代吉

（評）玉菜のうすみどりの色は印象的である。玉菜の重たさうな感じがマッスとして出てゐるところはいゝ。

さくさく麥刈つてゆく麥稈のかはくおと　　木衣穂

（評）「麥稈」といふと麥の穗をこいだあとのわらのことと解せられようが、此句では麥の穗のついてゐるままであらう。野外六月の光線といふものがピチ〳〵とはじけてゐるやうな感覺を取り上げようと試みたところに見どころがある。

花火の音は天子さま京にゐなさる星ぞら　　小平

（評）時事を詠じたものとして、手際の好い取り上げ方をしてある。花火は音だけで出して、星空に陛下の御膝下を感じた氣持はよくわかる。

もうかげがはつきり夏だとおもひハガキ一枚ポスト　　卓郎

（評）ハガキをもつてポストまでゆく途上の感じ。とある道の角にぽつんと立つてゐるポストのくつきりとかげをひいてゐる淋しい表情も、たしかに夏である。それを「夏だとおもひ」と素直にうち出したところに好感がもてる。

水にさいてゐて二人三人はくる夏の日　　俊一

（評）水にさいてゐるものは睡蓮か、しようぶかと思はれるが、或は二三種の花かもしれない。「二人三人は來る」といふ方にヒントを向けたものだから、「水にさいてゐる花」はボヤケてしまつた、そのボヤケた處に、やはらかな味を出してゐるいだ。そして、その寫眞的効果をしつかりと出す爲に「夏の日」と置いたところは手堅い技法である。

燒跡であつて夏雲そこの幸福といつた屋根で　　俊二

（評）普通の手法だと、「屋根」の上に「夏雲」をおいて寫生風に書くところだが、「燒跡であつて夏雲」と一通り風景的にまとめておいて、「そこの幸福といつたやうな」と感想的にそれをカヴアーした手法に新し味がある。燒跡であればこそ、炎熱の下であればこそ、どんなトタン屋根でも、屋根の下に住むといふだけの大きな幸福がある。とにかく單に風景だけの句よりも、そこに人間の出てゐる句の方が厚味があると思ふ。

層雲社七月例會

京都へ移つて、社の第一回の句會を七月二十日午後、層雲社の隣の光明院で催した。集る人、充夫、草史郎、惠美子、英夫、俊郎、千代吉、信夫、阿羅與、仙醉樓、二郎、秀雄、俊二、小平、木衣樓の諸氏。充夫氏の

くちなしの匂ふなどバケツで行水する

が高點で評にものぼつた。光明院の庭は重森三玲氏の作であつて東山の大きな青葉を背に石を植えた、龍安寺のそれとは異る感じの雄大な庭である。折から雲がときん〳〵雨をふらせ、石が落着いた苔の色をしづませ、一同清涼を滿喫した。層雲社句會は毎月第三日曜午後、催すことになつてゐる。八月は十七日。九月は二十一日。

高臺寺句會（京都）

六月二十九日、大會の後そのまゝ高臺寺に宿泊の人達が、一刻を惜んで句を語り且つ論じた。稻市、木天蓼、虹子、靈南、いわじ、赫城子、しげる、としを、茶丘、勇、善知、影外子、草樹、如水、井夢、牧句人の各氏に、地元から木衣樓氏と俊二が加はつた。稻市氏の如何にも念の入つた、さうして樂しさうな評に、善知氏の純理津山の人達の洗練された野趣、井夢氏の眞摯、如水氏の溫厚、草樹氏の覇氣、木衣樓氏の剛柔、牧句人氏の久しぶりの濶達なる熱論、遠く來り會して、各々樂しく、さうしてこの複雜怪奇なる夏の夜を明したことであつた。

泉の會（京都）

七月十二日午後、丁度北朗氏が京都へ來てをられるのを迎へて、冬川、木衣樓、仙醉樓、充夫、二郎、吸江、英夫、呵步、俊二、卓朗の十一氏、昔のやうな思ひで句評の所へ、福島縣から松村邦夫氏が、層雲社を訪ねた足で參座されて近頃珍らしく實の入つた會だつた。泉の會例會日は毎月第二土曜午後、會場は河原町四條上る新日本生命社屋。九月は十三日に開催の筈である。

菊の會（京都）

八月三日午後、眞葛が原の菊溪亭にて。木衣樓、すぐる、香林洞朝陽子、英夫、阿羅與、角笛、小平、俊二の九名。一月前井師の起居された室で、その机、その庭の青葉を井師を語り句を語つた。おばさんも猫も夏が實にしづかな日の句座であつた。菊の會の例會は毎月第一日曜午後、菊溪亭にて催すことになつてゐる。

ビル人句會（東京）

六月二十一日の例會は天氣の故か一寸集りが惡く、鳳車、秋紅蓼八洲雄、飛泉子、和史、晴樹、草露、三峽水、秀夫、棗人の諸氏でした。

葉櫻二階は雨の朝を掃く音　八洲雄

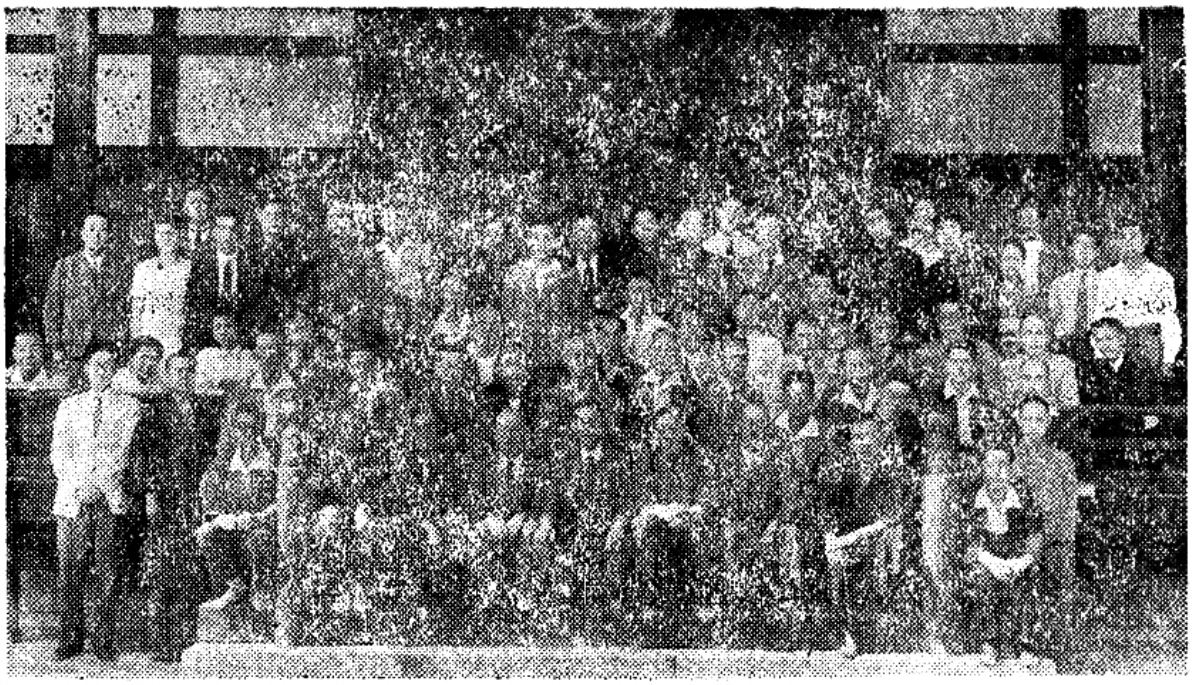
風が吹いて落したものを吹いてゐる　鳳車

が高點でした。ビル人句會は毎月第三土曜午後、日本橋室町三不動ビル銀行重役室で催します。九月は二十日の豫定。

×

神戸楠の會例會は毎月第二土曜夜六時より。兵庫區西出町六六七滴々亭、英之助氏居）にて。九月は十三日夜の豫定。

山梨縣北都留郡西原村で降矢百峰氏が中心で句會が新設された。主として學校關係者の集りで熱心に研究されてゐる。



投稿規定

俳句　荻原井泉水選
編集部選

- 投稿は誰でも自由
- 一人　一月　一稿
- 句數は一般は五句　會員Bは十句　Aは三十句迄
- 用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄楷書清記
- 二枚以上は左上カドを綴る
- 句稿の添削を望む方には内規がある照會ありたく

文章　編集部選
・評論　研究　隨想等

俳句會報
- なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える
- 俳句會報は層雲社に保存しておきます

投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切　毎月十五日

投稿先　層雲社編集部

層雲　第四〇七號

昭和廿二年七月廿五日印刷納本
昭和廿二年八月一日發行

定價　一部　十三圓
（送一、二〇）

前金で半年分以上お拂込下さい
何月號よりと御指定下さい
御轉居の際は發送部迄御報の事

神奈川縣大船町山之内（龍洞）
主宰　荻原井泉水
編集兼發行人　伊東俊二
京都市柳馬場四條上ル
印刷人　竹内貫美
京都市柳馬場四條上ル
印刷所　竹内萬聚堂
京都市東山區本町十五丁目
發行所　層雲社
振替京都八一七八番
東京都千代田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

自由律俳句 層雲 第三十五卷 第二號
昭和廿二年八月一日發行 [illegible]月一回一日發行
昭和廿二年七月廿五日印刷納本
定價 拾三圓
¥14・30

純植物性ポマード
Winna
純植物性
ウインナ化粧品本舗
瑞穗産業株式會社
大阪市北區梅ケ枝町 敷島ビル